

# 日本における外国人労働者問題の研究動向

文献を中心にして

森 廣正

---

はじめに

- 1 出版状況から
- 2 第1期（1982～1986年）
- 3 第2期（1987～1991年）
- 4 第3期（1992～1996年）
- 5 第4期（1997～2001年）

おわりに

## はじめに

周知のように日本で外国人労働者が社会的に問題視されたのは、1980年代中頃以降であった。外国人労働者問題が資本主義経済にとって不可避的現象である限り、明治維新を起点とする日本資本主義の歴史的発展も、さまざまな形態での外国人労働者の受入れを伴っていた。

だが、第2次大戦後、国内に広範な労働力供給源を抱えていた日本は、外国人労働者の国内での就労を原則として認めない閉鎖的な戦後体制を維持することが可能であった。「人的鎖国体制」とも言われる戦後体制のもとで、戦前・戦中に来日して戦後日本社会に在留した在日韓国・朝鮮人および中国人の存在は、一般的には「朝鮮人問題」として特殊化され、外国人労働者・住民として意識されることはなかった。このことが、1980年代以降の国際化時代の到来とともに生じた外国人労働者問題が、あたかも新しい問題であるかのように意識される背景でもあった。

日本における外国人労働者問題の研究は、すでに1970年代には、ヨーロッパ諸国での労働力不足部門における外国人労働力の導入、人種差別や外国人住民問題を中心に進められていたことも事実である<sup>(1)</sup>。

本稿の課題は、1980年から2000年を中心とする日本の外国人労働者問題の流れを追いながら、実

---

(1) イギリス、フランス、西ドイツ（当時）、スイスなどの西ヨーロッパにおける外国人労働者問題の状況を中心に進められた1970年代の日本の研究動向については、拙稿『西ヨーロッパにおける外国人労働者問題の一考察』- わが国における研究を中心として -（法政大学短期大学部学会『研究年報』第13号〔通巻〕1979年2月所収）を参照されたい。

際の動きが関連文献に反映されている状況を考察することである。特に1980年代後半から社会問題化した日本の外国人労働者が、外国人労働力の受入れ是非をはじめ、複雑で多様な諸問題を提起してきたこと、さらに滞在が長期化し定住化が強まるなかで、日本社会のあり方が問題の焦点になりつつある現状を考える一助になれば幸いである。

本稿末尾に、付属資料として「外国人労働者問題（日本語）文献目録」【1974～2001年】を掲載した<sup>(2)</sup>。これは、関連する単行本を中心に筆者が作成してきたものである。資料から明らかなように、過去20年間に筆者が直接接した関連文献だけでも390冊を越える。

また、本稿との関連で、「外国人労働者」、「国際労働移動」、「移民」の3つのキーワードで大原社会問題研究所所蔵の関連文献を検索して頂いたところ、2000年1月現在で和書が689冊、論文数が2015論文と膨大な件数にのぼっている。これは、過去20年の日本の外国人労働者が多くの社会問題を提起していることの現われである。

## 1 出版状況から

筆者が個人的に掌握している過去20年間における外国人労働者問題の関連文献は、合計395冊である。1982年から2001年までに発行された文献数を、5年毎の4つの時期に区分してみると、以下のようなになる。

第1期（1982～1986年）に発行された文献数は計13冊であり、1年間の平均は2.6冊にすぎない。それが、第2期（1987～1991年）になると同じく計88冊で、年間平均数は17.6冊であり、前期の7倍以上の文献が発行された。さらに第3期（1992～1996年）には、その数は計165冊、年間平均数も33.0冊であり、第2期の5年間の約2倍、第1期とは比較にならないほど膨大な文献が発行されている。第4期（1997～2001年）に発行された文献は129冊であり、年間平均数は25.8冊となっている。ちなみに、年間の関連文献発行数が最も少なかったのは、1983年の1冊であり、最も多かったのは1992年で、その数は年間50冊であった。

1970年代はじめにヨーロッパにおける外国人労働者問題がマスコミで報道され、研修生としてのアジア人労働力導入の動きがあった（落合英秋（1974.11.））とはいえ、戦後日本の新しい外国人労働者問題は、1980年代にはじまるといえるであろう。以上のような出版状況の背後には、日本の新しい外国人労働者問題が、「じゃばゆきさん」から外国人労働者への転換、1990年の「出入国管理及び難民認定法」（以下、「入管法」と略称）の改正による新しい段階への移行、同時にいわゆる「失われた10年」とも呼ばれる長期に及ぶ不況にもかかわらず一貫して漸増傾向を示している外国人労働者数の推移、在留形態に違いがあるものの彼らの就労と滞在の長期化と定住化が進む中で、それに伴う問題も多様化している状況がある。以下では、そうした状況について、これらの4つの時期区分にしたがってみることにしたい。

---

(2) 本稿で引用する文献は、特に断りのない限り末尾の「文献目録」に掲載したものであり、はじめに著者または編者を、その後の（ ）に発行年月を記載し、書名については省略している。

## 2 第1期（1982～1986年）

1980年代は、「日本経済国際化の時代」と言われ、日本企業の海外進出と業務の国際化は国内企業における外国人労働力への需要を増加させた。国内企業で働く欧米系の外国人労働者は、「外人社員」と呼ばれた。他方、この時期に急増したのが、フィリピンやタイなどから「興行ビザ」で入国し、性風俗業などで就労したアジア系女性外国人労働者であった。1985年のプラザ合意後に急速に進んだ円高を背景にアジア諸国からの男性労働者も増加しつつあったが、いわゆる「外国人労働者問題」として意識されるまでには至らなかった。以上のような状況は、文献の量とともに内容面にも反映している。この5年間に発行された関連文献数は計13冊、毎年1冊～3冊であり、年間平均冊数も2.6冊と少なかった。

日本企業に採用された欧米系外国人を中心とする「外人社員」を対象としているのが瀬下恵介（1983.2.）とグレン・ラウンダリー他著（1985.2.）である。「日本ビジネス体験記」という副題のついた前者は、大手企業で働く「外人社員」へのアンケートとインタビューにもとづくものである。他方、「労働の国際化への対応」という副題のついた後者は、日本の労働慣行に翻弄されて転職を重ねる「外人社員」の実態から、「真の労働の国際化」とは何かを問い、それを妨げている日本の経営や行政の現状と問題点を扱っている。アジア系女性外国人労働者を扱った文献が、山谷哲夫の『じゃばゆきさん』（1985.2.）である。著者は、母国の貧困を背景にして押し出され、国内の性風俗業で働くこれらの女性を、明治から大正にかけて日本から海を渡って出稼ぎに出た女性「からゆきさん」の名にちなんで「じゃばゆきさん」と名付けている。

在日韓国・朝鮮人、中国人に対する日本の差別的な社会構造を明らかにしているのが、神奈川県渉外部国際交流課による実態調査報告書（1986.7.）である。その前年、1985年は、在日外国人に義務付けられていた指紋押捺反対闘争が、全国で高揚した年であった。

## 3 第2期（1987～1991年）

1985年のプラザ合意以降、円高が進む中で日本の外国人労働者問題は新たな局面を迎えることとなった。アジア諸国からの外国人労働者が急増するとともに、従来は「不法就労」で摘発される外国人の圧倒的多数は女性で占められていたのが、男性へと転換したためである。換言すれば、「じゃばゆきさん」から「外国人労働者」問題への転換といえる。1981年に「不法就労」で摘発された外国人労働者数は1,500人にすぎなかったが、87年には1万人を越え、90年には約3万人に達した。男女別構成をみると1980年代前半には、その多くが女性で占められていたが、87～88年には男女の割合が逆転し、1990年には、その8割以上をアジア系男性労働者が占めている。

アジア系男性労働者の大部分は、国内では外国人の就労が認められていない一般の労働者であり、日本人労働者の就労忌避に伴ない人手不足に陥っていた3K労働（きつい、汚い、危険な労働）の職場に従事した。だが、その多くは「不法就労」であるが故に無権利状態や低賃金で過酷な労働条件を余儀なくされ、馴れない仕事や言葉の問題に起因する労働災害の多発などが社会的問題となった。

1980年代末には、マスコミをはじめ、様々な情報を通じて外国人労働者問題が社会的にクローズアップされた。新聞社は、アジア各国へ特派員を派遣し、各国の実態や日本への入国と就労を斡旋するブローカーの実態、国内で就労するアジア系外国人労働者の現状などの特集や連載記事を掲載した。そうした記録をまとめたものが、毎日新聞東京本社社会部編（1989.1.）、朝日新聞社会部編（1989.9.）、毎日新聞外信部編（1990.10.）である。また時期的には少し遅れるが、信濃毎日新聞社編（1992.1.）、讀賣新聞社特別取材班編（1992.12.）などがある。

日本が外国人労働者問題にはじめて接したかのように意識する社会状況のもとで、外国人労働者の受入れ是非をはじめとして、多くの論点が取り上げられた。そのひとつが、「ヒト」の開国か「ヒト」の鎖国かを巡る論争であり、開国派の石川好（1985.11.）、（1987.7.）と鎖国派の西尾幹二（1988.7.）、（1989.9.）に代表される。

アジア系外国人労働者の実態に関する現状分析と外国人労働者の受入れや国際労働力移動の理論研究に関する文献が多いことも、この時期の特徴といえる。前者については、アジア諸国からの「外国人出稼ぎ労働者」がキーワードでもあった。以下の文献は、アジア系外国人労働者の悲惨な状況や支援・救援・相談活動の状況の記録である。松井やより・内海愛子編（1988.4.）、アジア人労働者問題懇談会編（1988.9.）、五野井博明（1989.2.）、石山永一郎（1989.6.）、カラバオの会編（1990.11.）、天明佳臣編著（1991.8.）、CALLネットワーク（1991.10.）などである。

1980年代末に好況期を迎えていたが、大手自動車・電気関係をはじめ、建設・土木、食品などの下請け企業や中小零細企業の労働力不足問題は、「人手不足による倒産」が生ずるほど深刻な状況にあった。そうした中で、どうしたら外国人労働者を採用できるかを解説する文献、外国人労働者を雇用する雇用主のための参考書などの出版が多いのもこの時期の特徴である。たとえば、三浦隆子編（1987.11.）、布施直春（1989.3.）、（1990.1.）、東京都労働経済局（1989.4.）、外国人雇用問題研究会（1989.7.）、小林英之（1990.3.）、日経連雇用教育部（1990.3.）、前田茂・加藤健次（1991.2.）などである。

この時期から、一般的に、戦後日本の人的閉鎖社会における在日韓国・朝鮮人、中国人はオールドカマー、1980年代以降のアジア系外国人を中心とする新しい外国人労働者はニューカマーと呼ばれるようになった。国内に在留する外国人全体が孕む問題点を整理した良書が、田中宏『在日外国人』（1991.5.）である。同書の〔新版〕は、その後の新しい現象（資料）等を付け加えて95年1月に発行されている。

1980年代末の新しい外国人労働者の急増は、外国人の国内での就労を原則的に認めない戦後日本の入国管理制度、ひいては戦後社会体制のあり方をも問う問題であった。坂中英徳（1989.2.）は、副題が「坂中論文の複製と主要論評」であるように著者が1977年に自費出版した論文の復刻版である。それは、戦後日本の出入国管理行政の問題点から国際社会の動向、外国人担当行政のあり方について多くの示唆に富んだ文献である。長年、出入国管理業務に携わってきた著者の最近の見解については、坂中英徳（2001.2.）がある。

外国人労働者の受入れの是非をめぐる論争は、外国人労働者や国際的な労働力の移動が生ずるのは何故か、ヒトは何故国境を越えて移動するのかという素朴な疑問に対する諸理論を展開させる。同時に、その受入れ問題では、受け入れる外国人労働者の範囲、受け入れた場合に生ずる社会・経

済的諸問題，受入れ体制のあり方，さらに受け入れた社会のあり方などが多くの文献で扱われている。これらに関しては，森田桐郎編（1987.2.），宮島喬（1989.5.），花見忠他（1989.6.），駒井洋（1990.12.）などを指摘することができる。

戦前・戦後を通じて日本からブラジルをはじめ南米諸国に移民した日系人の母国への墓参に伴なう一時的な就労，また人材派遣業者の斡旋による就労が「不法就労」問題としてしばしば報道されたのもこの時期である。日系人労働者の急増は，1990年6月の「入管法」の改正以降顕著であるが，この時期に日系人労働者を扱った文献として，藤崎康夫（1991.3.）がある。

#### 4 第3期（1992～1996年）

1991年にバブルが崩壊し，日本経済は不況期を迎えた。1997年に一時的に景気上向き傾向がみられたものの，年末以降に再び低迷して「失われた10年」とも呼ばれる長期的な不況が続いている。不況が長引く中で，失業者が増加し，失業率も上昇している。1990年に2.1%であった失業率は，1995年には3.2%，1998年には4.1%，そして現在では5%を越えるまでになっている。ちなみに，2002年5月には，失業者数375万人，失業率5.4%である。

長期的な不況にもかかわらず，日本の新しい外国人労働者数は，一貫して漸増傾向にある。その背景には，1990年6月の改正「入管法」の施行がある。その詳細な記述は他に譲るが，それは，日本経済にとって有益な熟練労働，専門職，技能労働の外国人労働者の受入れ範囲は拡大するが，問題の焦点となっていた一般の外国人労働者（しばしば単純労働者という概念で理解され，同時にその供給源は圧倒的にアジア諸国でもあった）の受入れは国民的なコンセンサスが得られていないとして排除するものであった。したがって，「不法就労」を余儀なくされていた多くのアジア系外国人労働者への対策は，取締りと摘発の強化，「不法就労助長罪」の新設で対処することであった。さらに，社会問題化しつつあったブラジルをはじめとする日系人労働者には，就労に制限のない「定住者」の在留資格を与えた。その結果，日系人は国内で，いつでも，どこでも，どんな仕事にもつくことが可能となった。アジア系外国人労働者の就労には門戸を閉じ，日系人には自由な就労の道を開いたのが「入管法」改正である。以降，日系人労働者は急速に増加する。

ここで，1990年以降の外国人労働者数の流れを厚生労働省の資料でみると，1990年約26万人，92年約58万人，93年約61万人，96年約63万人である。ここから明らかなように，不況が長引く中で国内労働者の失業と失業率は上昇しているにもかかわらず，外国人労働者は漸増傾向にある。その数は，98年約67万人，2000年には約71万人になっている。

第3期の外国人労働者の特徴は，多くがアジア系外国人で占められている「不法就労」外国人労働者の占める割合が大きいことである。その数は，92年，93年ともに外国人労働者の半数を占めている。残り約30万人のうちの20万人がブラジルなどの日系人労働者，約10万人が就労目的別の合法的な外国人労働者である。

1992年は，過去20年間で最も多くの文献が出版された年であった。行政の対応についての注目すべき文献として，総務庁行政監察局編（1992.2.）がある。それは，「外国人の就労等の実態及びそれに伴う諸問題に対する関係機関の取組み状況を調査し，関係行政の改善に資する」（同書，3頁）

ことを目的としたものである。合法・非合法を問わず、人手不足を解消し、外国人労働者が中小企業経営にとって新たな戦力となっていることを実際の調査にもとづいて明らかにしたのが、稲上毅/桑原靖夫/国民金融総合研究所著（1992.6.）である。アジア系外国人労働者の実態分析から医療・福祉、住宅差別、結婚と子供の人権、日本の外国人管理政策と外国人行政を批判的に検討した文献にアジア人労働者問題懇談会編（1992.8.）がある。労働法分野では、宮里邦雄他編（1993.3.）、野川忍（1993.10.）、手塚和彰（1995.12.）がある。労働現場から生活領域への問題の拡大に伴い、外国人労働者の医療・福祉・人権などの実態と対策を扱ったものとして、佐藤進（1992.5.）、中桐伸吾・高山俊雄編著（1992.8.）、多文化間精神医学会（1995.6.）、吉岡増雄（1995.7.）がある。国際結婚の増加に伴う子供の人権や在留特別許可などを扱った文献にサーム・シャヘド/関口千恵（1992.6.）、新田文輝（1992.10.）、桑山紀彦（1995.9.）などがある。

不況が長期化するなかでの賃金水準の低下は、短期間でできるだけ多く稼いで帰国することを不可能にし、その結果、短期出稼ぎ労働は、長期化せざるを得なくなる。外国人労働者の滞在の長期化や日系人労働者の家族の呼び寄せが進む中で、外国人労働者から地域社会を構成する外国人市民・住民問題への取り組みが行政機関や各種支援団体に要請されるようになる。こうした問題点については、駒井洋（1993.1.）、江橋崇編著（1993.9.）、駒井洋監修・講座 [全4巻]（1995.10.～1996.7.）、宮島喬・梶田孝道編（1996.9.）などがある。

1990年の改正「入管法」によって、自由な就労が可能となった日系人労働者数は、90年の約7万人から、93年には約17万人、96年には約21万人へと増加した。日系人労働者や住民に関する文献が多くなるのは1994年以降であった。たとえば、モンセ・ワトキンス（1994.2.）は、日系人が「使い捨ての労働者」でよいのかを問う書である。渡辺雅子編著（1995.10.）は、日系ブラジル人に関する本格的な共同研究、調査・研究書であり、（上）論文編 [就労と生活] と（下）資料編 [体験と意識] からなる。他に、淵上英二（1995.4.）、日本語とポルトガル語の両国語で発行されたサイ・メディア研究会（1995.11.）、前山隆（1996.8.）、佐野哲（1996.9.）などがある。

外国人の定住化とともに日本の社会の将来像を多民族社会や多文化共生社会・共に生きる社会としてとらえる意識も定着しつつある。これに関しては、外国人地震情報センター（1996.1.）、駒井洋編（1996.3.）、沼尾実編（1996.11.）などを挙げることができる。

外国人労働者・国際労働力移動に関する理論や現状を分析した研究書が多数発行されているのも、この時期の大きな特徴である。以下、そうした文献の主なものとしてサスキア・サッセン著（1992.1.）、百瀬宏・小倉充夫（1992.3.）、梶田孝道ほか編（1992.4.）、矢内原勝・山形辰史編（1992.12.）、桑原靖夫編著（1993.3.）、大塚友美（1993.6.）、花見忠・桑原靖夫編（1993.11.）、島田晴雄（1993.12.）、森田桐郎編著（1994.6.）、本多淳亮他編（1995.1.）、S.カースルズ/M.J.ミラー（1996.12.）などがある。

## 5 第4期（1997～2001年）

1993年に60万人を越えた外国人労働者数は、96年には約63万人、97年以降は約66～67万人で推移していたが、2000年には約71万人へと増加している。1990年の「入管法」改正以降、日本の外国人

労働者は大きく三つのグループに別けて考察することができる。第1に、就労可能な在留資格にもとづいて滞在している合法的な外国人労働者、第2に、定住者ビザによって自由に就労することが可能な日系人労働者、そして第3に、オーバースティで「不法就労」を余儀なくされているアジア系外国人労働者である。ここで、1993年、1997年、2000年にそれぞれのグループが外国人労働者総数に占めていた割合を示すと、以下ようになる。一見して明らかなように、90年代はじめに全体の

	1993年	1997年	2000年
合法的な外国人労働者	15.6%	16.2%	21.8%
日系人労働者	28.6%	35.3%	32.9%
アジア系外国人労働者	48.5%	41.8%	32.7%
その他（特定活動、アルバイト等）	7.3%	6.7%	12.6%

（出所）厚生労働省「就労する外国人の推移」（推計）。

約半数を占めていた「不法就労」外国人労働者の割合が減少し、2000年には日系人労働者数とほぼ同数の約23万人で、全体の3分の1へと低下している。

67万人～70万人で推移したこの時期の外国人労働者は、これらの3つのグループ毎にそれぞれの問題を抱えているものの、ある意味では「安定的に推移」してきたということもできる。もちろん、悲惨なアジア系女性労働者問題、また日系であれ、アジア系であれ、不況下での低賃金の押し付けや、賃金未払い、突然の解雇などの事例が生じているが、マスコミをはじめ、社会的に外国人労働者問題が取り上げられるケースはきわめて少なくなった。

外国人労働者とその家族の滞在の長期化・定住化傾向が強まるなかで、自治体の外国人政策、人権・市民権・参政権、国際結婚と子ども、外国人の母子保健、多文化・多言語・共生など、問題の裾野が大きく拡大しているのが、この時期の特徴である。

駒井洋・渡戸一郎編（1997.5.）は、「内なる国際化への取組み」という副題が付されているように「多文化共生社会を構築するために、自治体レベルでの内なる国際化政策の様々な試み」（同書、「まえがき」より）の具体的な事例が紹介されている。労働者としての権利擁護だけでなく、生活者としての外国人の人権を擁護する視点にもとづく文献として、東京弁護士会・外国人的人権救済センター運営委員会編（1997.2.）、日本弁護士連合会編集委員会編（1997.8.）、田中宏・江橋崇編（1997.11.）、石田武臣ほか編著（1999.12.）、近藤敦（2001.9.）などがある。

外国人住民の市民的・政治的権利の焦点のひとつが地方議会参政権問題である。一定の居住期間（たとえば、3年間）を満たした外国人住民に地方議会の選挙権・被選挙権を附与している国も多い。またEU域内では、外国人住民にも国内住民と同等の地方議会参政権が保証されている。外国人市民の政治参加や地方議会参政権などについては、宮島喬編（2000.3.）、長尾一紘（2000.10.）、仲原良二（2000.12.）、近藤敦（2001.4.）、（2001.9.）などがある。

国際結婚、外国人の子どもや教育などに関しては、国際結婚を考える会（1998.7.）、斉藤弘子・根本厚美編著（1998.9.）、姜星財（1998.10.）、自由人権協会（1997.7.）、月刊社会教育編集部（1993.8.）、総務庁行政監察局編（1997.2.）、箕浦康子（1997.3.）、沼田裕之（1998.11.）、新海英行ほか編

(2001.12.) などがある。外国人母子については、季節子編(1998.7.)がある。また、外国人の生活全体に係わる「外国人の在留に関する行政の現状と課題」を扱っているのが、総務庁行政監察局編(1997.10.)である。また、2002年3月には、カトリック横浜教区滞日外国人と連帯する会編『日本で暮らす外国人のための生活マニュアル』【日英対訳】(スリーエーネットワーク)が発行された。

多民族国家・多文化社会およびブラジル人をはじめ日系人労働者・住民に関する調査研究などの文献は、この時期にも数多く出版されている。前者に関しては、倉田和四生編著(1997.3.)、明石紀雄・飯野正子(1997.4.)、田村紀雄(1997.10.)、川村千鶴子編著(1998.1.)、京大人間学部広報委員会編(1998.8.)、西川長夫他(1998.9.)、油井大三郎・遠藤泰生編(1999.5.)、関根政美(2000.4.)、西川長夫ほか編著(2000.6.)、佐々木高明(2000.9.)、NIRA・シティズンシップ研究会編著(2001.10.)を挙げることができる。後者については、上毛新聞社(1997.3.)、大宮知信(1997.11.)、本間圭一(1998.6.)、リリ川村(2000.5.)、モンセ・ワトキンス(2000.11.)、池上重弘編著(2001.8.)などがある。

グローバルな視点から外国人労働者・国際労働力稼働を扱った研究書が多く発行されたのがこの時期の特徴である。たとえば、労働市場の国際化を扱った井口泰(1997.2.)、その他、小倉充夫編(1997.5.)、ピーター・ストーカー(1998.3.)、佐藤誠/アントニー・J.フィールディング編著(1998.9.)、法政大学比較経済研究所/森廣正編著(2000.3.)、桑原靖夫(2001.2.)、伊豫谷登士翁(2001.7.)などがある。また、カービー・ミラー/ポール・ワグナー(1998.11.)、山田史郎ほか(1998.12.)に代表されるように、移民物語・移民史研究が多く出されていることもこの時期の特徴である。

## おわりに

本稿で取り上げた文献は、後掲の付属資料の一部である。ここでは、過去20年間で5年毎に時期区分し、それぞれの時期における外国人労働者・住民の推移と関連文献の関係を中心に考察した。問題領域が多岐に渡っているのは、国境を越えた「労働力商品」の移動に伴う外国人労働者問題は、一般の商品(モノ)や資本(カネ)の移動とは異なる人間(ヒト)の移動であるという、この問題が持つ本来的な性格による。

20年間で5年毎に区切って考察する方法は、個別問題領域を軽視する危険性がある。たとえば、お雇い外国人に関係する文献は、20年を通じてみると、レスリー・ハーバード=ガスタほか(1982.2.)、北政巳(1984.5.)、石附実ほか編(1987.4.)、堀内正昭(1989.4.)、荒俣宏(1991.2.)、太田雄三(1994.5.)、小玉順三(1997.12.)、北政巳(1998.10.)、片桐一男(2000.3.)になる。また後掲文献資料から明らかなように、地球規模で生じている外国人労働者・国際労働力移動のヨーロッパ諸国やアメリカ、アジア地域・諸国、その他諸外国・地域における現状分析や歴史分析に関する多くの文献が出版されている。ここでは、そうした文献に言及することはできなかった。

21世紀を迎えた日本の高齢社会は、生産年齢人口の減少を必至とし、今日の経済規模を維持してゆくためには、多数の外国人労働者の受入れを避けることはできない。外国人労働者の受入れ体制と将来の日本社会のあり方が問われているのが現実である。本稿と付属資料が、活用されれば幸いである。

(もり・ひろまさ 法政大学経済学部教授)

【付属資料】 外国人労働者問題（日本語）文献目録 【1974～2001年】

ここに掲載した目録は、筆者がこれまで接してきた外国人労働者・移民問題に関する日本語の単行本文献である。いろいろな雑誌・研究誌に掲載された関連論文、政府機関はじめ各種の行政機関や関連団体などの調査報告書などは収録されていない。左側に示した数字は、以下の文献が発行された年月である。ここでは、文献が扱っている内容等にかかわらず、時系列順に掲載している。本稿前文で示したように、多様かつ複雑な問題領域に及ぶ外国人労働者・住民（移民・難民も含まれる）の各種文献・資料は、膨大な数に及んでいる。単行本に限定しても関連する文献は多く、ここに掲載した文献（総数、397冊）がそのすべてを網羅しているわけではない。なお、執筆が各国にまたがる文献のうち、主なものについては、目次構成も掲げた。

- 1974．11．落合英秋『アジア人労働力輸入』現代評論社
- 1976．10．角田房子『アマゾンの歌』中公文庫
- 1982．2．レスリー・ハーバート＝ガスタ/パトリック・ノット著/宇佐美龍夫監訳『明治日本を支えた英国人  
地震学者ミルン伝』日本放送出版協会
- 9．富田虎男『アメリカ・インディアン』雄山閣出版
- 12．森田 劭『国際間移動の労働』昭和堂
- 1983．2．瀬下恵介『外人社員 日本ビジネス体験記』TBSブリタニカ
- 1984．1．林 瑞枝『フランスの異邦人』中公新書
- 2．土井たか子編『「国籍」を考える』時事通信社
- 5．北 政巳『国際日本を拓いた人々 日本とスコットランドの絆』同文館
- 1985．2．山谷哲夫『じゃばゆきさん アジアは女だ』情報センター出版局
- 2．グレン・ラウンダリー他著『ワタシたちはニッポンではたらくたい 労働の国際化への対応』  
日本生産性本部
- 11．石川 好『鎖国の感情を排す』文藝春秋社
- 1986．3．森 廣正『現代資本主義と外国人労働者』大月書店
- 4．大沼保昭『単一民族社会の神話を越えて』東信堂
- 7．神奈川県渉外部国際交流課【企画】『日本のなかの韓国・朝鮮人，中国人  
神奈川県内在住外国人実態調査より』明石書店
- 1987．2．森田桐郎編『国際労働力移動』東京大学出版会
- 第1章 総論 資本主義の世界的展開と国際労働力移動（編者）
- 第I部 世界経済の編成過程における国際労働力移動
- 第2章 19世紀前半の国際移民・国際投資と国際分業（尾上修悟）
- 第3章 ウェイクフィールドの植民理論と植民の現実過程（前田芳人）
- 第4章 アフリカにおける資本主義の浸透と国際生産構造（室井義雄）
- 第5章 インド移民とプランテーション経済（杉原 薫）
- 第II部 第二次大戦後の国際労働力移動
- 第6章 アメリカ合衆国におけるメキシコ人移民労働（伊豫谷登士翁）
- 第7章 西ドイツにおける外国人労働力導入の構造（木前利秋）

第8章 西欧における外国人労働者とその送り出しの構造（真瀬勝康）

第9章 中東の経済開発と国際労働力移動（小川雄平）

第10章 タイにおける資本主義の浸透と農村 - 都市労働力移動（平川 均）

4. 石附 実ほか編『ザ・ヤトイ お雇い外国人の総合的研究』思文閣出版
  6. G.ワルラフ著/マサコ・シェーンエック訳『最底辺』岩波書店
  7. 石川 好『ヒトの開国かヒトの鎖国か』パンリサーチ出版局
  11. 三浦隆子編『外国人雇用 KNOW - HOW』アルク
- 1988 .
1. 津田塾大学国際関係研究所『総合研究』No.2『移民労働者と国家』
  1. 水町亮介『犯されたアジア タイのじゃばゆきさん物語』ブレーンセンター
  3. 日本国際政治学会編『国際社会における人間の移動』（国際政治87）有斐閣
  4. 松井やより・内海愛子編『アジアから来た出稼ぎ労働者たち』明石書店
  4. 宮島 喬・梶田孝道編『現代ヨーロッパの地域と国家』有信堂
  5. 矢延洋泰『外からの開国，うちなる国際化』勁草書房
  7. 富岡次郎『現代イギリスの移民労働者』明石書店
  7. 梶田孝道『エスニシティと社会変動』有信堂
  7. 西尾幹二『戦略的「鎖国」論』講談社
  9. G.ディビスほか著『日本人が「国際人」といわれないワケ 在日外国人からの提言』経林書房
  9. アジア人労働者問題懇談会編『アジア人出稼ぎ労働者手帳』明石書店
  10. 田畑茂二郎『国際化時代の人権問題』岩波書店
  12. 法学セミナー増刊『外国人労働者と人権』日本評論社
  12. 宿谷京子『アジアから来た花嫁 迎える側の論理』明石書店
  12. 大島静子他『HELPから見た日本』朝日新聞社
  12. 東京都労働経済局『外国人労働問題マニュアル』三響社
- 1989 .
1. 手塚和彰『外国人労働者』日本経済新聞社
  1. 毎日新聞東京本社社会部編『じぱんく 日本を目指す外国人労働者』毎日新聞社
  2. 五野井博明『出稼ぎ外人残酷物語』エール出版社
  2. F.ギヤスパール他著/林 信弘監訳『外国人労働者のフランス - 排除と参加』法律文化社
  2. 坂中英徳『今後の入国管理行政のあり方について 坂中論文の複製と主要論評』日本加除出版株式会社
  3. 小草 (Xiao Cao) 著『日本留学1000日 北京っ娘の東京体験』東方書店
  3. 中井清美『定住外国人と公務就任権 70万人を締め出す論理』柘植書房
  3. 石井米雄・仲尾 宏『市民の目からみた国際化』明石書店
  3. 布施直春『外国人労働者の労務管理』日本能率協会
  4. 東京都労働経済局『日本で働く外国人労働者と雇用主のための  
外国人雇用と労働問題のハンドブック』三響社
  4. 堀内正昭『明治のお雇い建築家 エンデ&ベックマン』井上書院
  5. 宮島 喬『外国人労働者迎え入れの論理』明石書店
  6. ぐるーぶ赤かぶ編著『あぶない日本語学校』新泉社
  6. 花見 忠他『明日の隣人，外国人労働者』東洋経済新報社
  6. 石山永一郎『フィリピン出稼ぎ労働者 - 夢を追い日本に生きて』柘植書房

6. 村山裕三『アメリカに生きた日本人移民 日系一世の光と影』東洋経済新報社
7. 外国人雇用問題研究会『外国人雇用の実務』商事法務研究所
7. 東京都議会議会局『西ドイツにおける外国人労働者対策』研文社
8. R.コ-エン著/清水知久訳『労働力の国際的移動』明石書店
9. 朝日新聞社会部編『近くて近いアジア』学陽書房
9. 西尾幹二『「労働鎖国」のすすめ 外国人労働者が日本を滅ぼす』光文社
11. 天沼 香『日本人と国際化』吉川弘文館
11. 岡 義昭・水野精之『外国人が公務員になったっていいじゃないかという本』径書房
11. 張 錠壽(チャンチョンス)『在日六〇年・自立と抵抗 在日朝鮮人運動史への証言』社会評論社
1990. 1. 江口 幹『パリ、共生の街 外国人労働者と人権』径書房
1. 布施直春『改正出入国管理法と外国人労働者の雇用の実務』労働基準調査会
1. 澤田昭夫・門脇厚司編『日本人の国際化』日本経済新聞社
1. 手塚和彰『労働力移動の時代 ヒトの開国の条件』中公新書
2. 石井慎二編『日本が多民族国家になる日』JICC出版局
2. あるすの会編『ラパーン事件の告発 闘ったフィリピンの女性たち』柘植書房
2. 『朝まで生テレビ! 激論!! 外国人労働者』テレビ朝日
2. 同時代批評ブックレット3『東京難民戦争・外国人労働者問題が喚起するもの』青峰社
2. 関東弁護士連合会編『外国人労働者の就労と人権』明石書店
3. 小林英之『こうすれば雇える外国人労働者』(中小企業の人手不足に 대응する本) 明日香出版社
3. 日経連雇用教育部『外国人社員の採用と処遇』日経連広報部
3. 江橋 崇『外国人労働者と人権 日本・タイ関係研究の現場から』法政大学出版局
4. 外国人労働者問題懇談会『提言・外国人労働者問題 現状と対策をどう考えるか』
5. 植松忠博『日本の選択 国際国家への道』同文館
6. 成 美子(ソシミジャ)『歌舞伎町ちんじやら行進曲』徳間書店
7. 後藤純一『外国人労働の経済学 国際貿易論からのアプローチ』東洋経済新報社
10. 毎日新聞外信部編『第三の開国 世界を「漂う民」』朝日ソノラマ
11. カラバオの会編『仲間じゃないか、外国人労働者 取り組みの現場から』明石書店
11. 本多淳亮監修『外国人労働者の人権』大月書店
12. 駒井 洋『外国人労働者をみる眼』明石書店
1991. 1. 佐崎昭二『建設労働と外国人労働者』大成出版社
2. 荒保 宏『開化異国助っ人奮戦記』小学館
2. 前田 茂・加藤健次『Q & A 外国人労働者を採用するには』中央経済社  
第1章「現状と展望」 第2章「雇うまで」 第3章「雇うとき」  
第4章「雇ったら 社会保険等」 第5章「雇ったら 生活環境等」
3. 藤崎康夫『出稼ぎ日系外国人労働者』明石書店
3. 石田 雄ほか監修『自治体の新しい国際政策』ぎょうせい
4. 佐藤 勝巳『在日韓国・朝鮮人に問う 緊張から和解への構想』亜紀書房
5. 田中 宏『在日外国人 法の壁、心の壁』岩波新書
5. 奥田道大/田嶋淳子編著『池袋のアジア系外国人』めこん

6. 蜂谷 隆『それでも外国人労働者はやってくる』日刊工業新聞社
  7. 手塚和彰「続」『外国人労働者』日本経済新聞社
  7. 手塚和彰他編『シンポジウム 日本とドイツの外国人労働者』明石書店
  7. 岡部一明『多民族社会の到来 国境の論理を問う外国人労働者』御茶の水書房
  8. 天明佳臣編著『外国人労働者と労働災害 その現状と実務Q & A』海風書房
  8. 内藤正典他編『ドイツ再統一とトルコ人移民労働者』明石書店
  8. 梓澤和幸『悲しいパスポート 外国人刑事弁護の現場から』同時代社
  9. 柏木 宏『アメリカの外国人労働者』明石書店
  9. NHK取材班『ヒト不足社会 誰が日本を支えるのか』日本放送出版協会
  10. 石 朋次『多民族社会アメリカ』明石書店
  10. CALLネットワーク『あなたの街の外国人 かけこみ外国人労働相談』第一書林
  10. 今野浩一郎・佐藤博樹編『外国人研修生 研修制度の活用とその実務』東洋経済新報社
  11. 桑原靖夫『国境を越える労働者』岩波新書
  12. 社会保障研究所『外国人労働者と社会保障』東京大学出版会
    - 第1章 外国人労働者とわが国の社会保障法制（高藤 昭）
    - 第2章 経済のグローバル化と年金・税制（木村陽子）
    - 第3章 日米年金通算協定の在り方（堀 勝洋）
    - 第4章 滞日外国人の生活不適應および健康問題と保健・医療（山崎他）
    - 第5章 アジア諸国の移住労働者とかれらの社会保障保護（平石長久）
    - 第6章 スウェーデンにおける外国人受け入れ政策（岡沢憲美）
    - 第7章 アメリカ合衆国の移民政策と労働市場（伊豫谷登士翁）
    - 第8章 西ドイツのトルコ人（鴨澤 巖）
    - 第9章 社会政策における移民の扱い イギリスの場合（武川正吾）
    - 第10章 オランダの移民労働者と社会的統合政策（下平好博）
    - 第11章 EC統合と定住外国人の将来（梶田孝道）
    - 第12章 国際間労働移動のマクロ経済的効果と社会保障（粟沢尚志）
  12. 中岡三益編『難民 移民 出稼ぎ 人々は国境を越えて移動する』東洋経済新報社
- 1992 . 1 . 信濃毎日新聞社編『扉を開けて 外国人労働者の生活と人権』明石書店
1. 横山信子『建設、製造、組み立て工場働く外国人労働者のにほんご会話』
    - [日本語 韓国語・タイ語・ウルドゥ語] 三修社
    - [日本語 中国語・ポルトガル語・スペイン語] 三修社
  1. 広渡清吾「外国人と外国人政策の論理」
 

（東京大学社会科学研究所編『現代日本社会』6・東京大学出版会）所収

    1. サスキア・サッセン著/森田桐郎ほか訳『労働と資本の国際移動 世界都市と移民労働者』岩波書店
    2. 徐 龍達編『定住外国人の地方参政権』日本評論社
    2. 大阪弁護士会『18言語の外国人入権ハンドブック』明石書店
    2. 小山内美江子『外国人労働者と私たち』労働旬報社
    2. 総務庁行政観察局編『外国人をめぐる行政の現状と課題』大蔵省印刷局
    3. 百瀬 宏・小倉充夫『現代国家と移民労働者』有信堂

- 序章 移民労働者と現代国家の変容（百瀬 宏・小倉充夫）
- 第1章 日本における「外国人労働者」論議の諸問題（卓 南生）
- 第2章 ドイツの外国人問題と国籍（広渡清吾）
- 第3章 フランスにおけるイスラム系住民の同化と編入（伊藤るり）
- 第4章 メキシコ系「非合法」移民労働者とアメリカ国家（小井土彰宏）
- 第5章 コートジボワールの国民意識形成と移民労働者（原口武彦）
- 第6章 南アフリカにおける外国人労働者と人種隔離政策（小倉充夫）
- 第7章 中東地域の国際労働移動と移民政策（加納弘勝）
- 第8章 島嶼国フィジーにおける「国民統合」（小柏葉子）
- 終章 移民労働者問題と現代日本の国際関係認識（百瀬 宏）
3. 神奈川・多摩高ボランティアサークル編『高校で考えた外国人の人権』明石書店
3. 平成4年版『海外労働白書 激化する国際労働移動/深刻化する世界の雇用問題』
3. 手塚和彰・駒井洋・小野五郎・尾形隆彰編/神奈川県労働部労政課企画  
『外国人労働者の就労実態 総合的実態調査報告集』明石書店
3. 反差別国際運動（IMADR）/日本太平洋資料ネットワーク（JPRN）  
『みんながマイノリティ アメリカに見る民族複合事情』現代企画室
4. 手塚和彰ほか編・神奈川県労働部労政課企画『外国人労働者と自治体』明石書店
4. ゴラフ・バルハフティク著/滝川義人訳『日本に来たユダヤ難民』原書房
4. 梶田孝道ほか編『外国人労働者論 現状から理論へ』弘文堂
- 序章 外国人労働者問題 理論形成に向けて（伊豫谷登士翁・梶田孝道）
- ・法・国家と移民
- 移民・国家・世界経済 歴史的・理論的考察のために（木前利秋）
- 外国人受け入れの法的論理（広渡清吾）
- ・国際労働力移動
- 避けられない課題 戦後日本経済における外国人労働者（伊豫谷登士翁）  
『外国人労働者問題』と労働市場理論（式部 信）
- 外国人労働者送り出し国の社会的メカニズム（菊地京子）
- ・社会変容と文化葛藤
- 同化・統合・編入 フランスの移民への対応をめぐる論争（梶田孝道）
- 移民労働者の地理的集中と住宅問題 [西ヨーロッパ]（下平好博）
- 「ジャバゆきさん」現象再考 [八〇年代日本]（伊藤るり）
- 都市的秩序の崩壊 [メキシコ]（清水 透）
- あとがき（梶田・伊豫谷）
4. 宮島 喬『ひとつのヨーロッパいくつものヨーロッパ 周辺の視点から』東京大学出版会
5. 坂田義教編『社会変動と人間』法律文化社  
第九章「外国人労働者問題をめぐる基礎的視座」田淵幸親
5. 佐藤 進『外国人労働者の福祉と人権』法律文化社
5. 全国労働安全衛生センター連絡会議編『外国人労働者の労災白書  
深刻化する労働災害 問われる日本の国際性』92年版 海風書房

5. 山田・黒木著[新版]『わかりやすい入管法』有斐閣リブレNo.26
5. 澤 功『澤の屋は外国人宿』TOTO出版
6. 稲上 毅/桑原靖夫/国民金融総合研究所著  
『外国人労働者を戦力化する中小企業』中小企業リサーチ・センター
6. サーム・シャヘド/関口千恵『在留特別許可 アジア系外国人とのオーバーステイ国際結婚』明石書店
6. ブラジリアン・ベストクリエイション社著『パトリシオ ブラジル生れの日本人たち』柏書房
6. 宇都宮直子『日本は優しくかったか』講談社
7. 金 東勲『国連・移住労働者権利条約と日本』解放出版社
7. 日名子 暁『経・年・国籍不問 外国人労働者が100万人になる日』ダイヤモンド社
7. 長野大学産業社会学部編『信州の国際化とは』郷土出版社
8. 高橋秀実『TOKYO外国人裁判』平凡社
8. 中桐伸吾・高山俊雄編著『すべての外国人に医療保障を』海風書房
8. アジア人労働者問題懇談会編『侵される人権・外国人労働者  
日本への出稼ぎ労働者をめぐる現状と提言』第三書館
8. 手塚千砂子『タイから来た女たち 差別のなかのアジア女性』三一書房
9. 在日高麗労働者連盟『在日朝鮮人の就労実態調査 大阪を中心に』新幹社
9. 外国人労働者弁護団(ラフル)編著『外国人労働者と権利救済 弁護士の活動レポート』海風書房
10. 山本繁緯『国際労働移動の経済学 外国人労働者の受入れ問題の基礎理論』関西大学出版部
10. 久田 恵『フィリッピナを愛した男たち』文春文庫
10. 高口岳彦『地底の客人 グリュックアウフの日々』グリュックアウフ・ゲルゼンキルヘン会
10. 岡部義秀『海を越えてくるアジア人たち』大月書店
10. 筆宝康之『日本建設労働論 歴史・現実と外国人労働者』御茶の水書房
10. 新田文輝『国際結婚とこどもたち 異文化と共存する家族』明石書店
11. 相川俊英『東京外国人アパート物語』新宿書房
11. 鈴木讓二『日本人出稼ぎ移民』平凡社
12. 高橋幸春『行こか戻るか 出稼ぎジャポン』講談社
12. 杉本利男『ジバングの風』彩流社
12. 矢内原 勝・山形辰史編『アジアの国際労働移動』アジア経済研究所
- 序 章 国際労働移動の実態とその分析(矢内原 勝)
- 第1部 労働者送り出しの実態と政策
- 第1章 中国(石井知章) 第2章 フィリピン(山形辰史)
- 第3章 タイ(山形辰史) 第4章 パキスタンの海外労働移動概観(深町宏樹)
- 第5章 バングラデシュの労働力移動(長田満江)
- 第6章 スリランカ(中村尚司) 第7章 中東(畑中美樹)
- 第2部 労働者受け入れの実態と政策
- 第8章 香港(山越 徳) 第9章 台湾(劉 文甫)
- 第10章 シンガポール(山越 徳) 第11章 中東(畑中美樹)
- 第12章 日本(高宅 茂)
- 終 章 国際労働移動とアジア諸国の経済発展(山形辰史)

12. 国友隆一 『どこまですすむ日本のなかの国際化地図』 日本実業出版社
12. 江橋 崇 『外国人労働者と日本』 岩波ブックレット No.280
12. アジア人労働者問題懇談会編著 『外国人と国際人権』 海風書房
12. 讀賣新聞社特別取材班編 『揺れる労働開国』 悠思社
- 1993 . 1 . 野中恵子 『ドイツの中のトルコ 移民社会の証言』 柘植書房
- 1 . 駒井 洋 『外国人労働者定住への道』 明石書店
- 2 . 川人 博 『テキストブック 現代の人権』 日本評論社 （第3章「外国人の人権」梓澤和幸）
- 2 . 梶田孝道 『新しい民族問題 EC統合とエスニシティ』 中央公論社
- 3 . 桑原靖夫編著 『国際労働力移動のフロンティア』 日本労働研究機構
- 第1章 国際労働力移動システムの形成と発展（桑原靖夫）
- 第2章 アジア太平洋地域の労働力移動の動態（桑原靖夫）
- 第3章 アジアの送り出し国と受け入れ国の対応（山越 徳）
- 第4章 中国の労働力配置戦略と労働力移動（張 紀溥）
- 第5章 アメリカの外国人労働者政策とその労働市場への影響（笹島芳雄）
- 第6章 移民の同化プロセスの計量的分析（吉田良生）
- 第7章 アメリカの出入国管理政策（花見 忠）
- 第8章 オーストラリアにおける移民問題と定住政策（梅谷俊一郎）
- 第9章 フランスとベルギーの移民労働者政策（林 瑞枝）
- 第10章 ドイツにおける外国人労働者の受け入れ過程（八代充史）
- 3 . 法務省入国管理局 『出入国管理 国際化時代への新たな対応』 大蔵省印刷局
- 3 . 山脇啓造 『近代日本の外国人労働者問題』 明治学院国際平和研究所
- 3 . 宮里邦雄他編 『外国人労働者と労働法』 東京都労働経済局
- 4 . 浅野慎一 『世界変動と出稼・移民労働の社会理論』 大学教育出版
- 4 . 厚生省人口問題研究所編 『国際人口移動の実態 日本の場合・世界の場合』 東洋経済新報社
- 4 . 歴史学研究会「南北アメリカの500年」3 『19世紀民衆の世界』 青木書店
- 5 . 後藤純一 『外国人労働者と日本経済 マイグロノミクスのすすめ』 有斐閣
- 5 . 宮島 喬 『外国人労働者と日本社会』 明石書店
- 5 . 布施直春 『外国人労働者の雇用の実務』【改訂2版】労働基準調査会
- 6 . 大塚友美 『国際労働移動の政治経済学』 税務経理協会
- 6 . 佐藤文明 『在日「外国人」読本 ポーダレス社会の基礎知識』 緑風出版
- 6 . 小笠原和彦 『ニッポン人、元気ですか！ 外国人労働者物語』 現代書館
- 8 . エンツェンスベルガー著/野村 修訳 『国際大移動』 晶文社
- 8 . 月刊社会教育編集部 『日本で暮らす外国人の学習権』 国土社
- 9 . 江橋 崇編著 『外国人は住民です』 学陽書房
- 10 . 野川 忍 『外国人労働者法 ドイツの成果と日本の展望』 信山社
- 10 . 宮本政於 『在日日本人』 ジャパン・タイムス
- 10 . 長谷安朗他著 『バングラデシュの海外出稼ぎ労働者』 明石書店
- 11 . 花見 忠・桑原靖夫編 『あなたの隣人外国人労働者』 東洋経済新報社
- 11 . 李 英和 『在日韓国・朝鮮人と参政権』 明石書店

12. 島田晴雄『外国人労働者問題の解決策』東洋経済新報社
12. 難民・外国人労働者問題キリスト者連絡会編  
『移住労働者の権利を宣言する 移住労働者の権利条約/条文・解説』明石書店
- 1994 . 1 . 労働省職業能力開発局編著『外国人研修担当者実務必携』労務行政研究所
- 2 . 加藤 節・宮島 喬編『難民』東京大学出版会
- 2 . モンセ・ワトキンス著/井戸光子訳『ひかげの日系人 ガイジン記者が見た南米の出稼ぎ労働者』彩流社
- 3 . 中村尚史・河村能夫編『アジアからみるアジアをみる 外国人労働者と海外投資』阿吽社
- 3 . D.トレンハルト編著・宮島 喬他訳『新しい移民大陸ヨーロッパ  
比較のなかの西欧諸国・外国人労働者と移民政策』明石書店
- ・イミグレーションにかんする概念と理論的アプローチ
- 第1章 新移民大陸ヨーロッパ(ディートリヒ・トレンハルト)
- 第2章 レイズム(ロバート・マイルズ)
- 第3章 ヨーロッパ共同体と庇護申立者(ベルンハルト・サンテル)
- ・各国研究
- 第4章 イギリス 植民帝国の解体と移民(ロバート・マイルズほか)
- 第5章 文化的多元主義と反差別政策(ジグリッド・バーリングホルスト)
- 第6章 フランスにおける移民と移民政策(カトリーヌ・ヴ・ウエンデン)
- 第7章 ドイツ 宣言なき移民国(ディートリヒ・トレンハルト)
- 第8章 イタリア 遅ればせの移民の発見(マルコ・マルティニエッロ)
- 第9章 移民, ゲスト労働者, エスニック・マイノリティ(ヤン・フランケンほか)
- 4 . 本田博『ホンネで活かす外国人社員』につかん書房
- 4 . 藤原孝章『外国人労働者問題をどう教えるか』明石書店
- 4 . 奥田道大他著『外国人居住者と日本の地域社会』明石書店
- 4 . 駒井 洋編『外国人労働者問題資料集』上・下 明石書店
- 4 . 関根政美『エスニシティの政治社会学』名古屋大学出版会
- 5 . 梶田孝道『外国人労働者と日本』日本放送出版協会
- 5 . 歴史学研究会編『国民国家を問う』青木書店
- 5 . 太田雄三『ラフカディオ・ハーン 虚像と実像』岩波新書
- 6 . 森田桐郎編著『国際労働移動と外国人労働者』同文館
- 第1部 実態分析
- 第1章 現代の国際労働移動 実態・特徴・分析視角(森田桐郎)
- 第2章 ヨーロッパの苦悩, 移民の苦悩 旧西ドイツのガスト・アルバイター(木前利秋)
- 第3章 移民の国アメリカ 産業再編成と移民労働(式部 信)
- 第4章「石油の富」と移民労働 中東産油国への労働力移動(長沢栄治)
- 第5章 農村から都市へ・都市から外国へ アジアの開発と労働力移動(平川 均)
- 第2部 理論的諸問題
- 第6章 労働市場とジョブ構造 移民労働者位置づけのための基礎理論(式部 信)
- 第7章 移民と女性労働(久場嬉子)
- 第8章 生産様式の接合と労働力移動 低賃金労働力の再生産メカニズム(室井義雄)

第9章 労働力の移動と資本の移動（伊豫谷登士翁）

第3部 日本における外国人労働者

第10章 日本資本主義と在日朝鮮人 「単一民族神話」と差別（梶村秀樹）

第11章 日本における外国人労働者 最近の実態と問題（森田桐郎）

6. 内田勝敏編著『国際化のなかの日本経済 アジア経済圏における日本の役割』ミネルヴァ書房

6. アラン・ワトソン著/ロタ翻訳研究会訳『ドイツとドイツ人』エディションq

7. 莫 邦富『蛇頭 中国人密航者を追う』草思社

7. 越田 稜編著『国境の人びと トランスボーダーの思想』古今書院

8. マリオ・フォルトゥナート他著/関口英子訳『イタリアの外国人労働者』明石書店

8. M.R.P.バレスカス著/津田守監訳『フィリピン女性エンタティナーの世界』明石書店

9. 佐藤 忍『国際労働力移動研究序説』信山社

9. 永野 武『在日中国人 歴史とアイデンティティ』明石書店

10. 柳原和子『「在外」日本人』晶文社

11. 斉藤弘子『韓国系日本人 マリア・オンマの軌跡を追って』彩流社

11. 大和谷久次『1984～1992年資料日本における外国人労働者問題の展開』近代文藝社

12. 大野英二『ドイツ問題と民族問題』未来社

1995. 1. 佐野秀雄『外国人雇用・研修手続の手引』日本加除出版

1. 本多淳亮他編『外国人労働者問題の展望』大阪経済法科大学出版部

1. 岡 益巳他著『中国人留学生と日本』白帝社

1. 田中 宏『在日外国人 法の壁、心の溝』[新版]岩波新書

2. 山本健兒『国際労働力移動の空間』古今書院

4. 森田桐郎編『世界経済論 《世界システム》アプローチ』ミネルヴァ書房

4. 富田虎男『アメリカ・インディアンの歴史』【改訂版】雄山閣出版

4. R.スタヴェンハーゲン/加藤一夫監訳『エスニック問題と国際社会 紛争・開発・人権』御茶の水書房

4. 淵上英二『日系人証明 南米移民、日本への出稼ぎの構図』新評論

5. 経済協力開発機構編『国際的な人の移動の動向』日本労働研究機構

6. 多文化間精神医学会『外国人労働者ところ 多文化間精神医学の現在』

（『現代のエスプリ』第335号 至文堂）所収

7. 吉岡増雄『在日外国人と社会保障 戦後日本のマイノリティ住民の人権』社会評論社

7. 丹羽雅雄『知っていますか？外国人労働者と人権 一問一答』解放出版社

7. 的場昭弘『フランスの中のドイツ人

1848年革命前後の移民、亡命者、遍歴職人と社会主義運動』御茶の水書房

8. 奥田道大・田嶋淳子『新版・池袋のアジア系外国人 回路を閉じた日本型都市でなく』明石書店

8. アジアビジネス新時代取材班『アジアにはたらく 日経企業ビジネスマンの挑戦』下

日経BP出版センター

9. 西川長夫・宮島喬編『ヨーロッパ統合と文化・民族問題

ポスト国民国家時代の可能性を問う』人文書院

9. 岡部義秀『片道だけのパスポート 在日中国人の事件録』現代企画室

9. 労働省職業安定局編著『外国人雇用対策の現状』労務行政研究所

9. 桑山紀彦『国際結婚とストレス』明石書店
9. 野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク 移民の生活と労働の世界』山川出版社
10. 渡辺雅子編『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人』  
(上) 論文篇・就労と生活 (下) 資料篇・体験と意識 明石書店
10. 駒井洋監修・講座『外国人定住問題』(全4巻) 明石書店(1995.10. 1996.7.)  
第2巻: 駒井 洋編『定住化する外国人』明石書店
11. サイ・メディア研究会/パトリモニオ トーキョウ『素晴らしき夢・出稼ぎ  
南米ブラジル人からのメッセージ』柏書房
11. 小倉充夫『労働移動と社会変動 ザンビアの人々の営みから』有信堂
11. 村下 博『外国人労働者問題を斬る 国際人権水準の実現をめざして』部落問題研究所
12. E.パリバル/I.ウォーラスティン・若森章孝他訳  
『人種・国民・階級 揺らくアイデンティティ』大村書店
12. 手塚和彰『外国人と法』有斐閣
12. エリー・ケドゥリー編著/関 哲行ほか訳『スペインのユダヤ人 1492年の追放とその後』平凡社
1996. 1. 佐藤 進『国際化と国際労働・福祉の課題 法政策的側面から』勤草書房
1. 外国人地震情報センター『阪神大震災と外国人 「多文化共生社会」の現状と可能性』明石書店
1. 講座『外国人定住問題』(全4巻)  
第3巻: 広田康生『多文化主義と多文化教育』明石書店
2. 東京弁護士会・外国人入権救済センター運営委員会編『ハンドブック外国人法律相談』明石書店
3. 日本弁護士連合会人権擁護委員会『日本における難民認定手続実務マニュアル』こうち書房
3. 駒井 洋編『日本のエスニック社会』明石書店  
第1章 異国で暮らす 第2章 エスニック・ネットワークという橋  
第3章 日本人はどうみられるか 第4章 エスニック運動の可能性  
第5章 地域で共生する
4. 広渡清吾『統一ドイツの法変動 統一の一つの決算』有信堂  
第4章 外国人労働者・移住者・難民 外国人法制の新展開
4. 綾部恒雄『国家のなかの民族 東南アジアのエスニシティ』明石書店
5. 内藤正典『アッラーのヨーロッパ 移民とイスラム復興』東京大学出版会
5. 講座『外国人定住問題』(全4巻)  
第4巻: 渡戸一郎『自治体政策の展開とNGO』明石書店
6. 森田芳夫『数字が語る在日韓国・朝鮮人の歴史』明石書店
7. 講座『外国人定住問題』(全4巻)  
第1巻: 伊豫谷登士翁・杉原 達編『日本社会と移民』明石書店
8. 前山 隆『エスニシティとブラジル日系人 文化人類学的研究』御茶の水書房
9. 井上俊・上野千鶴子ほか編『現代社会学』24『民族・国家・エスニシティ』岩波書店
9. 宮島喬・梶田孝道編『外国人労働者から市民へ 地域社会の視点と課題から』有斐閣
9. 佐野 哲『ワーカーの国際還流 日系ブラジル人労働需給システム』日本労働研究機構
9. 阿藤誠編著『先進諸国の人口問題 少子化と家族政策』東京大学出版会
9. アムネスティ・インターナショナル日本支部『世界の難民の現在(いま)』明石書店

- . 世界の難民の現在（いま） . 95年 世界の人権
  - . 国際人権活動をめぐる動き . アムネスティの人権活動 . 資料
  - 9. 河 明生『韓日移民社会経済史』（戦前編）明石書店
  - 10. 会沢 勲編著『アジアの交差点 在日外国人と地域社会』【増補改定版】社会評論社
  - 10. 上智大学社会正義研究所・国際基督教大学社会科学研究所『滞日外国人と人権』明石書店
    - 基調講演「滞日外国人と社会正義」
    - ワークショップ（1）「出入国管理・労働行政」
    - ワークショップ（2）「滞日外国人労働者 家族・企業・地域社会」
    - パネルディスカッション「滞日外国人の人権と社会正義」
  - 11. 岩波講座「文化人類学」第7巻『移動の民族誌』岩波書店
    - 序 南へ！北へ！ 移動の民俗誌 山下晋司
    - 第一部「観光する人々，観光が作り出す文化」
      - 1 《南》ヘーバリ観光のなかの日本人 山下晋司
      - 2 コスタリカのエコ・ツーリズム 池田光穂
    - 第二部「移民たちの風景」
      - 3 世界システムの展開と移民 J.S.イーズ
      - 4 移民社会とホームランド サモア移民の経験 山本真鳥
      - 5 越境の民族誌 スルー海域世界から 床呂郁哉
    - 第三部「《はざま》に生きる」
      - 6 水でできたガラス 今福龍太
      - 7 難民 南部アフリカにおける越境と編入 北川文美
      - 8 在日朝鮮人 在日朝鮮人のアイデンティティの問題 浜本まり子
      - 9 「白人」と「黒人」の間で 日系アメリカ人の自己と他者 竹沢泰子
  - 11. 沼尾 実編『多文化共生をめざす地域づくり 横浜，鶴見，潮田からの報告』明石書店
  - 11. 岡崎淳一『アメリカの労働』§14移民及び外国人労働者 日本労働研究機構
  - 11. 東京都外国人相談研究会『外国人よらず相談 事例と回答120』日本加除出版
  - 11. 仁科健一・館野 哲編『異邦の韓国人・韓国の異邦人』社会評論社
  - 11. パーンウェル著/古賀正規監訳『第三世界と人口移動』古今書院
  - 11. 野中 恵子『ゾーリンゲンの悲劇 トルコ人労働者移民放火殺人』三一書房
  - 12. アルベール・メンミ著/菊地昌実・白井成雄訳『人種差別』法政大学出版局
  - 12. 山川 力『明治期アイヌ民族政策論』未来社
  - 12. S.カーズルズ・M.J.ミラー著/関根政美・関根薫訳『国際移民の時代』名古屋大学出版会
  - 12. 佐藤文明『「在日外国人」読本 ボーダーレス社会の基礎知識』【増補版】緑風出版
  - 12. 高橋正夫/シャロンS.パイパエ『「ガイジン」生徒がやってきた  
「異文化」としての外国人児童・生徒をどう迎えるか』大修館書店
- 1997 . 1 . 田畑 茂二郎『21世紀世界の人権』明石書店
- 1 . 高藤 昭『社会保障法制概論』第三部国際社会保障論 第2節内外人平等待遇の原則 龍星出版
  - 1 . 李 青若『在日韓国人三世の胸のうち』草思社
  - 2 . 東京弁護士会・外国人入権救済センター運営委員会編『Q & A 外国人のための法律ガイド』明石書店

2. 河 明生 『韓人日本移民社会経済史 戦前篇』明石書店
2. 浅野慎一 『日本で学ぶアジア系外国人 研修生・留学生・就学生の生活と文化変容』大学教育出版
2. 井口 泰 『国際的な人の移動と労働市場 経済のグローバル化の影響』日本労働研究機構
2. 総務庁行政監察局編 『教育の国際化を目指して  
日本語教育が必要な外国人子女や帰国子女の教育の現状と課題』大蔵省印刷局
3. 労働省職業安定局編 『外国人労働者の就労・雇用ニーズの現状』労務行政研究所
3. 前山 隆 『異邦に「日本」を祝る ブラジル日系人の宗教とエスニシティ』御茶の水書房
3. 箕浦康子 『地球市民を育てる教育』岩波書店
3. 上毛新聞社 『サンパの町から 外国人と共に生きる / 群馬・大泉』上毛新聞社
3. 駒井 洋ほか編 『新来・定住外国人がわかる事典』明石書店  
     . 新来外国人の実態      . 新来外国人の就労と生活      . 新来外国人の「定住化」  
     . 日本社会の対応      . 新来外国人と日本を取り巻く国際環境
3. 倉田和四生編著 『北米都市におけるエスニック・マイノリティ  
多民族社会の構造と変動』ミネルヴァ書房
4. 明石紀雄・飯野正子 『エスニック・アメリカ 多民族国家における統合の現実』(1984.9. 初版) 有斐閣
4. トーマス・K.ウォールズ著/間宮國夫訳 『テキサスの日本人』芙蓉書房出版
4. 三輪公忠編著 『日米危機の起源と排日移民法』論創社
4. 田口富久治・鈴木一人 『グローバリゼーションと国民国家』青木書店
5. ハルトムート・ケルブレ著/雨宮昭彦ほか訳 『ひとつのヨーロッパへの道  
その社会史的考察』日本経済評論社
5. マック・A.プレイヤー著/井口 博訳 『アメリカ雇用差別禁止法』木鐸社
5. 西成田 豊 『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家』東京大学出版会
5. 宮島 喬 『ヨーロッパ社会の試練 統合のなかの民族・地域問題』東京大学出版会
5. 山本剛郎 『都市コミュニティとエスニシティ』[アメリカにおける]  
日系人コミュニティの発展と変容      ミネルヴァ書房
5. 駒井 洋・渡戸一郎編 『自治体の外国人政策 内なる国際化への取り組み』明石書店  
     第1章 体系的政策の模索(川崎市, 横浜市, 神奈川県, 東京都)  
     第2章 外国人労働者への政策(浜松市, 太田・大泉, 群馬県)  
     第3章 大都市インナーエリアでの共生(新宿区, 豊島区, 大阪市, 大阪府)  
     第4章 固有の課題への取り組み(最上地域, 神戸市, つくば市, 沖縄県)
5. 小倉充夫編 『国際移動論 移民・移動の国際社会学』三嶺書房  
     序 章 国際移動の展開と理論 小倉充夫  
     第1章 国際移民システムの形成と送り出し社会への影響 小井戸彰宏  
     第2章 出稼ぎ労働者と地域社会 三島禎子  
     第3章 音楽文化と人の移動 西村秀人  
     第4章 移民政策と国民国家 柄谷利恵子  
     第5章 アジア系移民の台頭と多文化主義の変容 田村知子  
     第6章 「先進国」間の技能労働力移動 関谷恵樹  
     第7章 移民と言語変容 山下暁美

第8章 日本の外国人労働者とアジア 伊藤るり

6. 北原広子『ワタシ、タイから来ました 見えない隣人たちの素顔』ほおずき書籍
6. ヤン・ラト著/近藤 敦訳『ヨーロッパにおける外国人の地方参政権』明石書店
7. 自由人権協会『日本で暮らす外国人の子どもたち 定住化時代と子どもの権利』明石書店

序 文 荻野芳夫

- 第1章 ボランティアの証言から 板倉直壽
  - 第2章 ニッポン人をつくる教育 原田 治
  - 第3章 外国人の子どもと医療 旗手 明
  - 第4章 無国籍の子どもたち 錦織 明
  - 第5章 外国人の子どもの在留の保護 竹岡八重子
  - 第6章 子どもの権利条約からみた外国人の子どもの権利 藤本美枝
8. 日本弁護士連合会編集委員会編『定住化時代の外国人の人権』明石書店
  8. I.ウォーラースティン著/川北 稔訳『史的システムとしての資本主義』(新版)岩波書店
  9. 多文化社会研究会編訳『多文化主義 アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリスの場合』木鐸社
  10. 田村紀雄『「国境なき労働者」とメディア 日本にもやってきた多言語社会』日中出版
  10. 総務庁行政監察局編『外国人にも住みよい日本をめざして

外国人の在留に関する行政の現状と課題』大蔵省印刷局

11. 田中 宏・江橋 崇編『来日外国人入権白書』明石書店
  11. 大宮知信『デカセギ 逆流する日系ブラジル人』草思社
  12. 日本労働研究機構編『労働の国際化』日本労働研究機構
- 序 章 総論・労働の国際化と日本的経営システム
- 第1章 外国人労働者問題
  - 第2章 国際人事管理
  - 第3章 国際労働移動の計量分析
12. 高橋幸春『日系人 その移民の歴史』三一書房
  12. 小玉順三『幕末・明治の外国人医師たち』大空社
- 1998 .
1. 川村千鶴子編著『多民族共生の街・新宿の底力』明石書店
  1. 木村昌人・田所昌幸『外国人特派員 こうして日本イメージは形成される』NHKブックス
  2. 九州産業大学公開講座委員会『国際化と文化の多様性』九州大学出版会
  3. ピーター・ストーカー著/大石奈々・石井由香訳『ILOレポート 世界の労働力移動』築地書館
  3. 松本宣郎・山田勝芳編『移動の地域史』(地域の世界史5)山川出版社
- ・未知の土地を求めて . 強いられた移動 . 地域を結ぶ道
3. 外井浩志『パートタイマー・外国人雇用』生産性出版
  4. 小泉康一『「難民」とは何か』三一書房
  4. アムネスティ・インターナショナル日本支部『難民からみる世界と日本
- アムネスティ・イン・日本支部人権講座講演録』現代人文社
5. 酒井英幸『国際化時代の社会保障 高齢社会への日本の対応』勁草書房
  6. 本間圭一『南米日系人の光と影 デカセギから見たニッポン』随想社
  7. 李 節子編『在日外国人の母子保健 世界に生きる世界の母と子』医学書院

7. 国際結婚を考える会『国際結婚ハンドブック』(第2版) 明石書店
7. 原尻英樹『「在日」としてのコリアン』講談社現代新書
8. 金子マーティン『「ジブシー収容所」の記録 ロマ民族とホロコースト』岩波書店
8. 京大人間学部広報委員会編『異文化との出会い 国際化のなかの個人と社会』京大術出版会
8. 清水昭俊編『周辺民族の現在』世界思想社
- 序 章「周辺民族と世界の構造」清水昭俊
- 第1章「変容はいかに語られたか ブッシュマンの日常会話から」菅原和孝
- 第2章「周辺化と軍事化 南部スーダン・バリ人と外部勢力」栗本英世
- 第3章「周辺性と民族的対立」松井健
- 第4章「周辺社会と外部社会の接合 ミドルマンの戦略的適応」前川啓治
- 第5章「現代の「アイヌ民族」」河野本道
- 第6章「噴火被災の苦難を越えて」清水 展
- 第7章「石器時代人」タサダイ再考」玉置泰明
- 第8章「アメリカ・インディアンのアイデンティティ」谷本和子
- 第9章「先住民族が成立する条件」ステュアート ヘンリ
- 第10章「ソロモン諸島の社会運動と中心世界の使い方」棚橋 訓
8. 秋山宣夫他著『外国人が日本人によく聞く 100の質問』三修社
9. 西川長夫他著『アジアの多文化社会と国民国家』人文書院
9. 斉藤弘子・根本厚美編著『国際結婚 100家族』明石書店
9. 佐藤 誠/アントニー・J.フィールドینگ編著『移動と定住 日欧比較の国際労働移動』同文館
- 第 部 日本をめぐる状況
- 第1章 日本の国際労働移動をめぐる議論の特徴 佐藤 誠
- 第2章 日中間の人口移動と社会的ネットワークの形成 田嶋淳子
- 第3章 日本の華人系マレーシア人非合法滞在者 石井由香
- 第4章 日系ブラジル人のデカセギの長期化 石川雅典
- 第5章 在日朝鮮人問題の起源 文 京洙
- 第 部 ヨーロッパ
- 第6章 現代ヨーロッパにおける国際人口移動 A.J.フィールドینگ
- 第7章 ヨーロッパにおける東西労働力移動とドイツ F.Y.ケンベル
- 第8章 マグレブ - 西欧間の国際人口移動 セイラ・コリンソン
- 第9章 南欧への移民の新しい流れ ブラック/マリエイロス
- 第10章 イングランドおよびウェールズにおける移民労働者と階級構造 A.J.フィールドینگ
10. 法務省入国管理局『出入国管理 21世紀の円滑な国際交流のために』(平成10年版) 大蔵省印刷局
10. W.コノリー/杉田他訳『アイデンティティ/差異 他者性の政治』岩波書店
10. ch.M. タクサシ他著『アイヌ民族の歴史と文化』明石書店
10. 駒井 洋編『新来・定住外国人資料集成』上・下 明石書店
10. 佐久間考正『変貌する多民族国家イギリス』明石書店
10. 姜 星財『私の妻は日本人 日韓文化交流ものがたり』東方出版(大阪)
10. 上坂冬子『揚輝荘, アジアに開いた窓 選ばれた留学生の館』講談社

10. 山田迪生『船にみる日本人移民史』中公新書
10. 北 政巳『近代スコットランド移民史研究』御茶の水書房
11. 沼田 裕之『国際化時代日本の教育と文化』東信堂
11. カービー・ミラー/ポール・ワグナー『アイルランドからアメリカへ  
700万アイルランド人移民の物語』東京創元社
12. 藤崎康夫『ブラジルの大地に生きて 「日系移民の母」渡辺トミ・マルガリーダの生涯』くもん出版
12. 山田史郎ほか著 近代ヨーロッパの探求 『移民』ミネルヴァ書房
- 序 章 移住と越境の近代史(山田史郎)
- 第1章 イタリアの移民:ヴェネトからブラジルへ(北村暁夫)
- 第2章 東欧の移民:ガリツィア・ユダヤ人のアメリカ(大津留厚)
- 第3章 オーストラリアへの移民:大洋を渡る女たち(藤川隆男)
- 第4章 ドイツへの移民:第二帝政期ドイツにおける外国人労働者(柴田英樹)
- 第5章 米国への移民:ホワイト・エスニックへの道(山田史郎)
- 第6章 ラテンアメリカへの移民(国本伊代)
12. 佐渡拓平『カリフォルニア移民物語』亜紀書房
12. 鹿毛達雄『日系カナダ人の追放』明石書店
- 1999 . 2 . 下平好博「外国人労働者 労働市場モデルと定着化」  
(稲上毅・川喜多喬編『講座社会学』6 東京大学出版会)所収
- 2 . 細川周平『シネマ屋, ブラジルに行く 日系移民の郷愁とアイデンティティ』新潮社
- 3 . 村下 博『外国人労働者問題の政策と法』大阪経済法科大学出版部
- 4 . 町村敬志『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社
- 4 . トーマス・ハンマー著/近藤敦訳『永住市民(デニズン)と国民国家 定住外国人の政治参加』明石書店
- 4 . 富岡宣之『ひとの国際的移動 国際社会と日本』嵯峨野書院
- 5 . 油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ  
揺らぐナショナル・アイデンティティ』東京大学出版会
- 5 . サスキア・サッセン著/伊豫谷登士翁訳『グローバリゼーションの時代 国家主権のゆくえ』平凡社
- 7 . 重松伸司『国際移動の歴史社会学 近代タミル移民研究』名大学出版会
10. 藤崎康夫『母と子でみる ブラジルへ 日本人移民物語』草の根出版会
10. 田尻鉄也『ブラジル社会の歴史物語』毎日新聞社
11. 久保田誠一『頼もしいアジアの友人たち』スリーエーネットワーク
11. 青井和夫ほか編『市民性の変容と地域・社会問題  
21世紀の市民社会と共同性:国際化と内面化』梓出版社
12. マニュエル・トッド著/石崎晴己・東松秀雄訳『移民の運命 同化か隔離か』藤原書店
12. 石田武臣ほか編著『外国人問題弁護ノート』アルク新書
- 2000 . 1 . 駒井洋ほか編著『超過滞在外国人と在留特別許可 岐路に立つ日本の出入国管理政策』明石書店
- 1 . 小林茂文『ニッポン人異国漂流記』小学館
- 1 . 猿谷 要『歴史物語 アフリカ系アメリカ人』朝日新聞社(朝日選書641)
- 3 . 宮島 喬編『外国人市民と政治参加』有信堂
- 3 . 片桐一男『江戸のオランダ人 カピタンの江戸参府』中公新書

3. 韓瑞穂『異境 私が生き抜いた中国』新潮社

3. 入管統計研究会『我が国をめぐる国際人流の変遷

出入国・在留統計にみる国際化の現状』大蔵省印刷局

3. 法政大学比較経済研究所/森廣正編著『国際労働力移動のグローバル化

外国人定住と政策課題』法政大学出版局

#### 序章 国際労働力移動(森 廣正)

#### 第一部 国際労働力移動の歴史分析

第1章 19世紀イギリスにおけるアイルランド人移民の特質(斉藤英里)

第2章 戦間期ドイツの外国人労働者(阿部正昭)

#### 第二部 ヨーロッパにおける国際労働力移動の新現象

第3章 新しい段階を迎えたドイツの外国人労働者・住民問題(森 廣正)

第4章 「銀世界」をめざすマグレブ系労働者のスペイン定住化(中川 功)

第5章 ポルトガルをめぐる国際人口移動(岡野内 正)

#### 第三部 アジア・アフリカ・オセアニアの国際労働力移動

第6章 マレーシアの経済発展と外国人労働者(吉村真子)

第7章 隙間に生きる人々(山本真鳥)

第8章 オーストラリアにおける移民,労働市場と多文化主義(Valerie McGown)

第9章 アジア系移民の東アフリカ社会への適応と不適応(江原憲一)

第10章 国際労働力移動におけるアジア女性(吉村真子)

#### 第四部 国際労働力移動のなかのブラジルと日本

第11章 還流型移民としての《デカセギ》(森 幸一)

第12章 来日日系人労働者の動向(西川大二郎)

4. 関根政美『多文化主義社会の到来』朝日新聞社

4. ドウス昌代『イサム・ノグチ 宿命の越境者 上・下』講談社

5. リリ川村『日本社会とブラジル人移民 新しい文化の創造をめざして』明石書店

5. 手塚和彰『国際労働移動と法規制』(日本労働法学会編集 講座21世紀の労働法

第2巻『労働市場の機構とルール』有斐閣)所収

5. 古賀正則編著『移民から市民へ 世界のインド系コミュニティ』東京大学出版会

6. 西川長夫ほか編著『20世紀をいかに越えるか 多言語・多文化主義を手がかりにして』平凡社

6. 内海愛子ほか編『石原都知事「三国人」発言の何が問題なのか』影書房

6. 内海愛子ほか著『「三国人」発言と在日外国人 石原都知事発言が意味するもの』明石書店

6. 出入国管理法令研究会編『入管法Q & A』三協法規

8. 佐藤唯行『アメリカのユダヤ人迫害史』集英社新書

9. 佐々木高明『多文化の時代を生きる 日本文化の可能性』小学館

10. 長尾一統『外国人の参政権』世界思想社

11. モンセ・ワトキンス著/井戸光子訳『夢のゆくえ 日系移民の子孫,百年後の故国へ帰る』現代企画社

12. 仲原良二『在日外国人と参政権』解放出版社

2001. 1. 神雄英一『在日外国人が創る新市場』ダイヤモンド社

2. 桑原靖夫『グローバル時代の外国人労働者 どこから来てどこへ』東洋経済新報社

